あぶらむ通信

第40号　2018年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL・FAX 0577-72-4219
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp

韓国 シスター マーサからのグリーティング

飛騨便り

穏やかな小春日和のような晩秋の日々が続いています。早い年ならば10月末、遅い年でも11月中旬には初雪が来るというのに、今年は12月に入ってもその気配は感じられません。しかし、「雪虫」というおなかに白い分泌物をつけ雪片のように舞いとぶ幻想的な虫がチラホラと飛びはじめました。この雪虫が舞うと数日内に雪が降るといわれています。季節はめぐる。あたたかな晩秋といっても初雪はもうすぐでしょう。長い前置きになってしまいましたがあぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過しのことと思います。

○定点観測、30年の気象変化

母親からあき性、三日坊主と云われ続けてきた私、70年余も生きてきた間にだいぶ根気よくなってきたところはあるのですが、毎年試みては挫折してしまうものに一年間の「天気表」がある。この地に来て32年、人生の１/３の年月をかけて今年やっとこの一年の「天気表」が完成することになった。こうして一年の天気を表にしてみるとこの一年間いかに晴の日が多かったか、雨がいかに少なかったかがよくわかる。

特に７月は強烈で４日間降り続いた集中豪雨、そしてその後14日間連続の快晴、おまけに41.1℃という日本記録付き。この気象は人間だけではなく、動植物にもこたえたに違いないと思っている。

７月４日から７日までの集中豪雨は日本列島水没かと思うほど強烈で、広島、岡山をはじめ各地に大きな被害をもたらした。

この飛弾地も例外ではなく、私の住むこの集落でも避難指示が出た。避難所に行ったところであむらむの里を守れるわけではなく、また一日のささやかな楽しみのビールも飲めないので、私はここに居てビールを飲みながら里内に満ちた山からの大量の水の排水作業に従事していた。

敷地面積２万４千坪（８万㎡）のあぶらむの里は南斜面で前に宇津江川が流れ、後側は山、風水学では最高の気の流れ条件。しかし、ここに集中豪雨、それも４日間も続くとなると別の世界になってしまう。これまでの経験を活かして地上表面にあふれ出た水を本流に導くために水路を整備し、途中に船も浮ぶような遊水池もつくった。遊水池から本流への水路は30㎝×45㎝の側溝。しかし、池の出口８ｍ分だけが林道設置の関係で直径25㎝のコンクリート管を伏設していた私、これだけの太さがあれば十分と思っていたがとんでもハップン。この８ｍ分の排水能力が不十分だったため水路の持つ排水機能が十分に発揮できず、池の水はあふれ出て、里中が水没したようになってしまった。

こんな豪雨はこの地に来て２度目、それもつい最近のこと。雨の降り方だけみても何かがどこかで確実に変化しているとしか思えない。雨ばかりではなく雪にしてもしかり。雪の降り出しが年々遅くなり、降雪量も少なくなり、雪質もウェットになり重くなってきた。30年前、子ども達が雪玉をつくるのに、乾いた粉雪だったため玉にならず、バケツに水を用意してそれにつけて雪玉をつくったのに、今はにぎると水がしたたり落ちる。里内の木々もこの気象変化をまともに受けて、多くの木々が雪の重さで倒されている。この変化はあぶらむの里というこの地に住んでの定点観測だからわかるのであって、コンクリートで埋めかためられたような人工的空間ではわかりづらいように思う。私たちの生活に大きな影響を及ぼす気

象、果してこの先どうなるのだろうか。この地に住む者としては実に切実な大きな問題である。

○２反４畝の田と百姓一揆

尺貫法が廃止されメートル法が施行されたのは、私が小学校４年生のころだったと思う。そのころの私は、身長（長さ）以外は尺貫法でないと理解できなかった。あれから60年余経った今でも面積はメートル法では理解できない。畳２枚で１坪が一番わかりやすい。あぶらむの田は１反５畝の□田と９畝の△田の２枚、合計２反４畝である。メートル法では24アール、坪でいえば720坪、畳1,440枚分の広さである。昔風にいえば水呑み百姓に毛のはえたような耕作面積である。しかし、わずかこれだけの面積でもこれを昔ながらの人力でやろうと思うと大変なもの。現代人の我々には不可能に近い。農業機械の力にたよるしかないのである。

米作りをやるには最低でも４種類の機械を必要とする。①田起し、代かきのためのトラクター、②田植え機、③稲刈りとそれを束ねるバインダー、④脱穀機ハーベスタの四つである。これらの作業を全て人力でまかなおうと思えば腰痛、関節痛で長期入院まちがいなしである。現代人のからだはもうそうなることになってしまっている。これまであぶらむは人様に拝借したり、スクラップ寸前の機械を買求めて、どうにか急場をしのいできた。５年前65万円で購入したトラクターが故障したので修理を依頼したら、もう20年も前のキカイ、部品はないと冷たく云われた。新品ならば180万円ほどのキカイが15年落ちで１/３、よく調べもせずに安易に買ってしまった自分に腹が立った。近い将来、次の世代に渡して行かなければならないあぶらむ、先代達はポンコツ農業機械ばっかり残していったと云われるのも口惜しいので、新品で揃えてみようと思ったら、この４つの機械だけで450万円余もかかることがわかった。２反４畝のあぶらむ田から収穫される米は約20俵、1,200kgである。これをもし農協に売り渡すとすれば全部で24万円ほどの収入、キカイの償却に幾年かかるのか、償却が終ったころはもう部品なしで修理不能。こうしてわずか２反４畝の水呑み百姓は永遠にキカイ貧乏の渦の中に落ち込んで行くのです。「450万円分もの米、この世に４～５回ほど生まれかわってきても食べきれないね」とバカなことを口走っていた私でした。では何故そこまでしてまで米作りにこだわるのだろうか。古い奴だとお笑いでしょうが、「お米ができるまで」は私たちの生活の基本だと思うからです。これまで家庭裁判所の補導委託制度で21人の少年と各々半年間の生活を共にしてきたが、少年達の「更生」ということにこの「お米ができるまで」が大きく関わっているように思うからです。それはゼニカネ、経済効率など現代の価値基準を超えているのです。一つのものが出来るまでのプロセス（過程）をどう日常的に学ぶことができるのか、それは現代的課題であると思う。若者よ、スマホを離れて泥にまみれましょうよ！

それにしても昔のお百姓さん達は大変だったと思う。キカイ農業の私でもそのことは実感する。江戸時代末期、この飛彈地方は６公４民、時には７公３民という時もあったというから驚き以外何もない。収穫の６割が税としてまきあげられ、残りの４割の中からその半分近くを地主に納める。自分のものとして手元に残るのが１～２割、死罪覚悟で“一揆”を起したお百姓の気持、痛いほどわかる。江戸末期飛彈には「大原騒動」という大きな百姓一揆が

あった。直訴した者の首をはね、それを塩漬にして高山まで運び、現在の斐太高近くの河原でその首をさらしたという。あぶらむの諸魂庵は宝永元年（1704年）に建てられたもの。この建物の中で一揆の相談がなされたのではないかと、自分は勝手に想像している。

第一次産業と第二次、三次産業間の大きなひずみ、我々はそれをこれからどう克服して行くのか。私は「お米ができるまでと人育て」で模索したいと思っている。

○ファミリーホームあぶらむ設立に向けて

本年11月30日、養護養育を必要とする家庭的施設「ファミリーホーム」の設立許可申請書類を、高山子ども相談所を通して岐阜県に提出した。ぼう大な内容の提出書類、その作成まで多くの人々の協力があった。心より感謝、お礼申し上げます。

「人生は旅、私たちは旅人」、2004年に開始した家庭裁判所の補導委託制度に基づく「更生」を求めての少年達とのここでの生活。16～18才の人生がはじまったばかりという年齢なのに、厳しい現実の真直中に置かれている少年を幾人も見てきた。「更生」が求められているのは少年ではなく、周囲の大人、社会なのではないかと思うことが多くあった。一人の少年が事そこに至るまでに、大人として、社会としてもっとできることがあったのではないかと思う日々が続いてきた。

様々な理由から親に育ててもらえない、自分の家庭で生活できない、そのような養護養育を必要とする子は我国ではこれまで「養護施設」という一つの大きな集団の中で育てられてきた。これに対して欧米では90％近くが里親の元、一般家庭で養育されている。数年前より日本政府も従来の「施設型養育」からなるべく家庭に近い環境でと里親養育へと舵を切り出した。今後10年を目標に里親の元での養育１/３、３～５名の小集団ファミリーホームでの養育を１/３、そして残りは従来の養護施設養育としている。

多くの人々の協力によって出来上がってきた「あぶらむの里」、30年生活して思うことは、ここはこれから人生旅路を歩もうとする若者育て、特に10～18才の少年に最適と思っている。一杯のご飯が食卓にのぼるまでにどれだけの労があるのかだけではなく、ここを訪ねる多くの「大人」との出会い、そしてそこから生まれる学びや気づき。多くの人々との交わり、関わりの中で育って行く子ども達の姿を見てきた。それはある意味では私たち世代の子どものころの生活環境とよく似ている。世の中、あまりにもスマートになってしまって、気がついたら自分一人になってしまっていた。私は今の社会を見ていてそう思えてならない。生きるということはもっと泥くさいこと、地べたにはいつくばるようなことだと思っている。私はこのあぶらむの里という環境で、残りの人生、何らかの理由で養護養育を必要とする子に、これまで私が歩んできた人生を伝え、共に地べたに立ち、泥くさく生きようと思っている。

「ファミリーホームあぶらむ」、設立許可がおりましたら最後の一働きをしたいと願っています。その時は又応援下さい。皆様がそれぞれの人生で得られたものを次代を背負う子ども達にもお伝え下さい。新たな地平が開かれて行くことを願っています。

それではどうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

2018年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

大切なことは進行形

小川　卓

大郷先生に初めてお会いしたのは18歳の春、立教大学チャプレンだった先生が付属高校に出向いての特別授業でした。テーマは「Who am I?（私って誰？）」。どんな講義内容だったかほとんど忘れてしまいましたが、事あるごとに脳裏に浮かぶ先生の言葉があります。
『原理とは不動ではなく問い続けること。大切なことは進行形。』
えっ？揺るがないのが原理でしょ？進行形？と驚いた瞬間の教室風景がストップモーションのように浮かんできます。

大学３年の頃、元気だった還暦間近の父に突然のがん余命６ヶ月宣告。「あと半年で父がこの世から消えてしまう」途切れない重苦しさを生まれて初めて経験しました。ちょうどその頃の私は、米国を自転車で横断するようなチャレンジングな友人達に憧れ、「何かすごいことに挑戦したい」と浮き足立っていました。そんな自分が「父との最期の日々を大切に過ごしたい」という内心に気づけたのは、チャペル会館２階の大郷先生の部屋でした。「チャレンジは自分の内側を見つめながら」という言葉がストンと自分の中に入ってきて、父の病室から授業に通う日が多くなりました。そんな看病する姿が院長の印象に残ったのか、数年後には一緒に働こうと誘ってもらい、父を看取ったその地元病院に転職し、今年で27年目になります。

病院で働き出して最初に戸惑ったのは働く目標でした。前職の銀行員の頃は「預貸和（預金＋貸出金）増」という分かりやすい目標がありました。病院では何を目指せばいいのか？業界紙に載っていた有名な事務長曰く「患者獲得で病院繁盛」と。あんな苦しい思いをする患者や家族が増えればいい？とてもそうは思えないし、患者を飯の種と割り切る姿勢は許せない、と反発しました。しかし、「隣の病院より立派になろう」は組織を活性化させますし、患者さんがこなければスタッフに給料を払えないのも事実。私自身の等身大のこだわりと現実との隔たりに滑稽なほど悩みました。

また、医療業界を見渡せば、目を輝かせながら奉仕の心で就職しても、白衣の天使が天使のままでいられぬような、こころ凍える現実があることを知りました。癒しの場である病院でスタッフ同士が無用な摩擦に日々磨り減り、立ち止まることもできずに燃え尽きていく。医療技術を持たない私には何ができるのか、学生時代には興味を持てなかった経営学に真剣に取り組みました。

組織には動き出したら止まらない大きな慣性があり、その力は強大で、個人で押し返し続けるには無理があります。そんな中で組織風土を変革するには、構成するひとりひとりが、自分たちの組織をありのままに見つめ、自分たちに合った試みを、自分たちで工夫しながら行っていくこと。その繰り返しが組織による横暴や沈滞を防ぐ手段になるはずだと思いました。そこでレーガン政権下の1980年代、大きく落ち込んでいた米国の国際競争力復活を目指し、当時の日本を研究してつくられた経営理論に出会いました。まさしく和魂洋才であるそのしくみは、４つの理念『①顧客本位②独自能力③社員重視④社会との調和』をバランスよく達成するために、自分たちの組織のありたい姿を設定し、基準や仕組みを自分たちで考えて、改革を繰り返すことを喜びとする、この循環をまわし続けるプロセスを大切にします。

今は自院だけでなく、いくつかの病院と一緒に病院経営改革に取り組んでいます。

現代の病院が提供する医療そのものについてもいろいろと思うところがあります。ケガで１カ月入院した際には私自身、現代医療の有り難さを心底感じました。今の医療のほとんどは人類の歴史と共に引き継がれてきた献身的研究と誠意の結晶であり、感謝しながら享受すべきものだと思います。しかし、資本主義社会の中で提供される医療サービスが純粋に過不足ないものかと考えると、患者自身が賢くなる必要を感じます。また病院は病気に関しては専門家ですが、健康に関してはあまり詳しくありません。人生100年時代が到来し、いかにすれば与えられた命を健やかに全うできるか、という知恵まで求められても病院には荷が重すぎます。

第２回あぶらむツーリング（2015/8/18 ～ 19. あぶらむの里⇔能登島 450km）七尾市能登島の民宿浜弥さん前にて

あぶらむツーリングクラブ（前田晃伸会長）では素晴らしいメンバーとワクワクするバイクライフを楽しんでいます。大郷先生は「バイクに乗ると腰痛に効くんだよ」と言います。普通なら「生兵法は大けがのもと」とお諫めすべきかもしれませんが、そんなこともあるように思うのです。バイクは前後左右を見ながら風向きや風の強さにも気を配りながら運転します。路面の凹凸やエンジンの振動を自分の身体で吸収しながら安定を保ちます。そうやって弛緩と緊張を同時に行うことが全身のリフレッシュになるのかもしれません。本当の健康とは五感を使って自らのこころとからだに向き合うことからはじまるのではないでしょうか。少なくとも健康診断の数値だけに一喜一憂するよりも、よほど健全だと思うのです。幸いなことにあぶらむ会員には大山直子さん（鍼灸マッサージ師）や播磨裕治さん（ヨガ教師）のような心身と向き合うプロフェッショナルがいらっしゃいます。そして衣食住は健康の礎です。もちろん音楽や演劇、落語をはじめ、あらゆる芸術も健やかな人生になくてはならないものです。多士済々のあぶらむの会であれば、そんな知恵と体験の共有がもっとできるのでは、と期待しています。

第３回あぶらむツーリング（2016/8/22 ～ 23. あぶらむの里⇔奥能登 450km）なぎさドライブウエイ千里浜にて

病院で働きだした４年後の平成７年３月、地下鉄サリン事件が起きました。翌週にあぶらむへ行き、全貌が明らかになる前の新聞記事をながめながら事件の話題となりました。大郷先生は少しためらいながら、「オウム真理教がどんなものか分からない、が、ここにいなさい、ここにいなければ幸せになれない、というのはニセモノだと思うんだ。さあ、行きなさい、と送り出すことができるか、だと思うんだよな。」何気なく聞いたこの言葉も繰り返し反芻する言葉となりました。真偽を見定めなければならない時、どんなに理路整然とした主

張であったとしても、「ここにいなさい派」か「さあ行きなさい派」なのか、その視点でみることが判断の助けになります。逆に自分に当てはめて反省することも多いです。優秀なスタッフから転職の相談を受けると反射的に引き留めてしまうからです。深呼吸してから「さあ行きなさい」とは言えないまでも「チャレンジの時かな」と語りかけるようにしています。

今年３月、立教学院展示館において、「フィールド・エデュケーション　生きた場から学ぶ立教の教育プログラム～大郷博チャプレンの働きを通して～」が西村さん、宮崎さんを中心とした多くの協力者により開催されました。あの静謐な空間で丁寧に揃えられた資料や映像から、多くの気づきを得られたことを心から感謝しています。その準備作業の中で、大郷先生が大学離れる前の最後の沖縄キャンプで参加学生に向けて書いた文章に目が止まりました。

『４月から全く新しい歩みが始まろうとしている。不安でもあるがもう後退はできない。自分の言葉に責任をとろうと思う。愛楽園の人々が人前に出て声高にさけびたくてもできなかったことを代弁して行きたい。』

『たとえ苦しくて辛い体験があったとしても、それをもってして自分の人生をきめつけ、価値観を固定し、他者との関わりの距離を固定してしまうのは嫌です。』

この言葉が書かれた32年後のつい先日、「あぶらむってひとことでナニナニですと説明できないから困るんだよ」と先生。その全くブレていない姿勢と常に進行形たらんと行動する姿を改めてすごいと思いました。そして、その実践の日々を支えている育さんはもっとすごいと思いました。

今も続く大郷先生と私たち教え子との関係は「師弟関係」といえるのかもしれませんが、師匠から何の指図も受けないし、弟子には何の義務もないという不思議な師弟関係です。そんな関係でも、気がつくと知らず知らずに影響を受けています。大郷先生の言葉は答えではなく、道しるべのようです。それも敢えて立ち止まらせたり、遠回りさせるような、時にめんどくさい道しるべです。理屈を語って効率良く成果を出すことは理にかなっているかもしれません。しかし、行動する背中で語る以上に深く伝わるものはありません。自分がたいせつにしたいものは何なのか。どこを見て生きているのか。頑固なまでに本質を見続けようとする大郷先生の生き方と言葉です。分からない言葉を分からないままに、心のどこかに留めておくと、フッとその言葉の意味が分かった気がして、「そうだよ」と言われた気になる。しばらくするとまたわからなくなって、その繰り返しのなかで、少しずつ深くなっていくような気がします。進行形ってそういうことなのかな？だとすると大切なことを大切にできているのかな？と18歳の疑問はまだ続いています。

家裁少年の手記

2004年に始まった家庭裁判所の補導委託制度に基づく少年の受け入れ、今年で21人目の少年となった。 ここ数年、委託打ち切りや逃亡など、心痛むことが続いた。久しぶりに半年間生活を共にし、お互い新たな気持ちで送り出すことができた。21人目の少年の記。

あぶらむでの生活を振り返って

I君17才

僕はこの場所に来るまでは、親に甘やかされて育ってきました。理由はひとりっ子だったので大事にしてあげたいという親の気持ちからだと思います。そのおかげで僕は優しい人間になりましたが、その反面自分からは行動を起こさなくなり上げ膳据え膳状態になってしまいました。家の事は家族に任せっきりで、自分はゲームをしたり昼寝をしたりしてぐうたらしていました。メンタルも弱くストレスをためやすかったので今回の事件を起こしてしまった自分の弱い所だと思います。

この場所に来てから変化した所は、自分から少しですが動けるようになり他力本願をしないようになりました。しかしまだまだ変われていない所もたくさんあります。この場所にいる残り数日間で１日１日をしっかり生きてもう２度と同じ事件を起こさないようにしたいと思います。

富山まで歩いて思った事は、この場所に来てから運動を全くしていなかった僕でも74km歩けるのだなと思ったことです。なので74km歩いた自分の体をほめてあげたいなと思います。初めから無理だとは言わずに、まずは挑戦してみることが大切だと思いました。僕は無理だと思うとすぐに楽な道に進もうとしてしまいます。なので富山まで歩いたことをきっかけにして、行動を変えていくようにしたいと思いました。最初から最後までの全部を１人で歩いた少年は僕しかいないらしく、これはとてもすごいことなんだなと思いました。

この場所に来たおかげでやりたい事や自慢できる事が見つかりました。この場所で学んだことを活かして後悔のないような人生を送りたいと思います。そのためにもまずこの場所を卒業してからは、自分が好きだと思う仕事に就いてしっかり仕事をしていきたいと思います。今分からなくてももう少し大人になってから大郷先生がこの話をしていたなとか思い出してここでの生活は半年だけだったけど一番楽しかったよなと思えたらいいなと思います。

また時間ができたら手伝いやイベントにも顔を出せるようにしたいと思います。

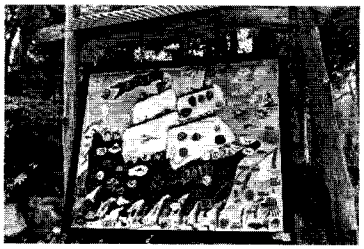
本当にお世話になりました。これ以外にも五衛門風呂の湯のわかし方や畑の野菜の種まき・収穫・水やり・間引きなどもしました。僕は畑の仕事をしている時が、一番楽しく、野菜が成長していくのを直に見ていたので１日１日大きくなっていく野菜達を見て感動しました。自分が畑の手伝いをして収穫した野菜はより一段とおいしく苦手だったナスも食べれるようになりました。なので卒業してからは、農業の事を１からしっかりと学べるような環境で生活できたら嬉しいです。

あぶらむに通い続ける理由 ～ 旅人の宿でもらった４つの幸せ

川上　美砂

五右衛門風呂を出ると、冷たい森の空気がほてった身体を包んでくれる。真っ暗だと思って夜空を見上げれば、キラキラと星が輝いている。ナラ林から舞ってきた落ち葉がカサッと肩に触れていく。ああ！こんな幸せな時間をみんなも味わえたらいいのになぁと思いながら母屋に戻った。

三十数年前に立教大学の学生だった私は、ここ数年、東京の自宅と飛騨高山を行き来する生活をしてきた。公民館で若いお母さん向けの講座やシニア講座、ロビーコンサートなどを企画運営している私は、仕事が好きだし、やりがいもある。月16日勤務なので職場や家族と相談しながら、あぶらむに行く日にちを月１、２回生み出していく。そうまでして、あぶらむに通うのはなぜ？と時々聞かれる。今年を振り返って自分に問いかけてみた。



【みんなの笑顔が輝く、夏のあぶらむ】

８月は大忙し、なかでも自然学校は楽しかった。新宿から高山に向かうバスで隣の席だった小学４年の女の子はバスの中で話している時から、「今年は川に飛び込みたい」と言っていたが、双六川ではその言葉通り、他の子たちと一緒に見事な飛込を何度もしていた。飛び込めなくても、魚もいる川での遊びは楽しい。やんちゃな大郷先生も今年は何年ぶりで飛び込んで水飛沫を上げていた。来年こそはと思っている子もいただろう。夜になれば諸魂庵の広間に布団の花が咲く。眠れない子の心配をしてあげる子、寄り添って寝る子たち、やがて皆ぐっすりと眠る。今年は女の子たちによる「お化け屋敷」の自主企画があった。迫力満点、大成功だった。ただお化けになる側の女子にも怖がる子もいた。ある子は途中まではなんとか耐えていたのだが、「だいじょうぶ？」と駆け寄った数人が全員お化けメイクで、耐えきれずに泣いてしまうというハプニングもあって、思わず笑ってしまった。ハイキングで湿原を歩いている時には、時計をみていた小学６年男子が、急に立ち止まって目を閉じていたこともあった。聞けば、長崎の原爆投下の時間だからという。はっとさせられた。最終日はあぶらむオリンピックで盛り上がった。競技は農作業用の一輪車に薪を積んでの全員リレー、重機のユンボのバケットにテニスボールを投げ入れる玉入れなど。「東京オリンピック、ここでやれば涼しいのにね」という子、「この競技なら大会運営費ゼロだね」と笑うおとな。最後は「また来年会おうね」と元気に手を振って帰っていった。今は、全員で描いたみんなを乗せた船の壁画が、あぶらむの道路に面した入り口に、森をバックに誇らしそうに立っている。

普段は別々の生活をしている子どもたちが一緒に過ごす自然学校。個人の知識を競うのではなく、ともに体験する場だ。自然のなか、みんなで楽しく過ごすために知恵や力を出しあうひとり一人の姿が心に残った。そして、保護者さんたちはちょっぴり心配しながらも、楽しい経験をして成長してほしいと送り出してくださっている。かつて私もそう願っていたから分かる。裏方さんも含めて、スタッフ全員がそれを支えるために精一杯関わった。あれから４か月、みんな楽しめたかな？覚えているよね？そして、私はみんなから教えてもらいま

したよ。夢中になって楽しむことが、次に向かうエネルギーになるのだということを。

【米作りで汗を流すと、ご飯がさらに美味しくなる】

田んぼの作業にも参加した。春の肥料撒き、田植え、(草取りは不参加)、稲刈り、脱穀。暑い、腰が痛い、足が田んぼに埋もれる、そのうえ機械のトラブルも。けれど汗だくになって働く爽快感がたまらない。遠くに見える乗鞍岳もいい。その後の五右衛門風呂とビールと育さんの美味しい食事を囲んでの時間は最高！1年にわずか数日の農作業なのに、東京に戻ってからも飛騨の空模様が気になるようになっていた。ほんとうの厳しさは分かっていないのだろうけど、農作業をすることで食への想像力が広がるし、ありがたさを実感する。こうした経験は、誰にとっても必要で、生きていくうえで大事なことだと思う。そうしていただいくご飯は、コシヒカリよりも美味しい！

【面白くて深い、あぶらむでの出会い】

さらに、あぶらむの魅力は様々な人との出会いだ。時には驚くような経歴や個性を持つ人が現れる。落語会、コンサートなどのイベントが縁で来てくれた方たち。海外からのウーファーさんなど、今年もいろんな人たちと知り合った。ご自身のことも含めて、奇人変人の集まりなどと言う人もいるけれど、日頃の人間関係を超えて幅が広がっていくのは楽しい。大郷先生ご夫妻のふとした言葉にはっとさせられることも多いし、何よりお二人のユーモアが格別だ。滞在していた少年との関わりも心に残った。秋になり、五右衛門風呂で薪を入れて火を炊く少年の顔は穏やかだ。ここでの体験を糧に、焦らずにやっていけばいいんだよと声をかけたくなる。少年にも、私自身にも。

【どの季節も美しい、あぶらむの風景】

11月、あぶらむの厨房のドアを開けた時のこと。裏山の斜面の紅葉が青い空に映えて、キラキラ光っているように見えて思わず、「うわぁキレイ！」と声をあげてしまった。靄がかかる水墨画のような南側の風景はもちろん素晴らしいけれど、この宿を包むすべての方角の風景が美しい。朝でも夕でも、季節も問わない。いっせいに花が咲き、緑が萌える春もいいけれど、しんと冷え切った冬景色も心を澄ませてくれる。薪ストーブに手をあてながら見る雪景色は息を飲む美しさだ。30数年前にここに立ち、この場所を決めた大郷先生と育さんの気持ちが少しわかる気がする。台風や豪雨など厳しさもあるけれど、次の季節のあぶらむの表情が見たくて、また来ようと思うのだ。

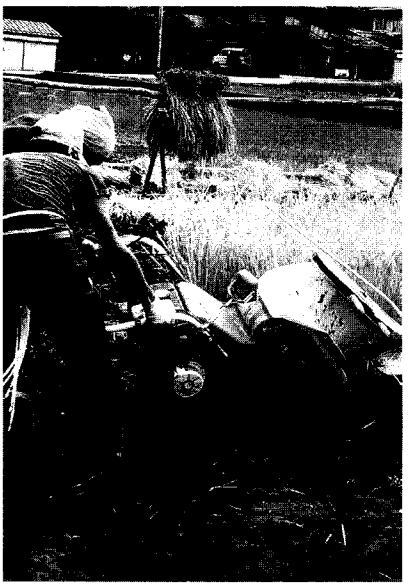
幼いわが子を連れて通った日々から20年以上が経過した。私もいつも元気だったわけではなく、仕事や子育てで壁にぶつかって足踏みしている時もあった。あぶらむで生活していると、カモシカが出たり、突然の訪問者が来たり、風雨で物が壊れたり、いつも何かしらのハプニングや問題が生じる。そして思いもよらない解決になったり、ユーモアで笑い飛ばしたり、すぐに解決しなくてそのまま時を待ったりする。『毎日が順調に問題だらけ』という感じなのだ。そして、一夜明ければまた美しい朝が来る。それでいいのだと思う。東京に戻っ

ていく時には、自分のなかに静かなエネルギーが満ちているように感じた。だから、お客としてでも、お手伝いとしてでも、ここへ来ることが支えになった。私にとってあぶらむの宿は『人生という旅をするための宿』そのものだったのだと思う。

だから、月にたった数日、微力だけれど、ある時は心を癒したい少人数の泊り客のために食事作りを手伝い、ある時は冬支度のためにトラック何倍分の落ち葉かきをしよう。またある時はお腹がよじれるほどに笑い転げ、ある時は誰かの打ち明け話にしんみりと耳を傾けたい。私にとってそうだったように、ほかの誰かにとってもここが大切な『宿』であり続けられるように。

この文章を読んでくださっているあなたも、あぶらむにつながっている大切なお一人です。どうかいつの日か、宿でお会いできますように。

写真でみる今年の景色



わずかな面積でも手刈りとなると大変。無理にでも機械を入れて刈り取る。しかし、沼田用の車輪も埋まってしまった。昔のお百姓さんの苦労が伝わってきた。

膨大な落ち葉の量。木は水を貯えるというが貯えるのは落ち葉。建物周りをきれいにしておかないと、傷みが早くなる。3年もすれば土になり、それを田畑にかえす。大きく限りない自然の循環。しかし落ち葉集めの手作業は大変。このバケット30杯分は軽く超え、小山になった。

『第６期通常総会　開催報告』

第６期通常総会を2018年3月に立教学院チャペル会館で開催いたしました。多くの方に参加いただき、心よりお礼申し上げます。

日　　時：2018年３月３日（土）15：00～16：10
場　　所：立教学院チャペル会館第一会議室
出 席 者：正会員25名
総会次第：
（1）開会挨拶
（2）議長・議事録署名人・書記の指名
（3）定数の確認
（4）議案
・第６期活動報告
・第６期決算報告及び監査報告
＜貸借対照表＞
資産合計102,480,914円（流動資産47,541,811円　固定資産54,939,103円）
負債合計　　109,670円（短期借入金109,670円）
正味財産102,371,244円（うち当期正味財産増加額13,064,702円）
＜収支内訳＞
収入合計28,040,339円（会費収入1,276,000円　寄付収入14,805,180円
研修収入7,832,020円　他）
支出合計12,760,571円（減価償却費を除いた実質支出10,857,238円）
当期収支15,279,768円（減価償却費を除いた実質収支17,183,101円）
・第７期活動計画
・第７期予算(案)
＜収支予算案＞
収入合計13,720,000円（会費収入1,500,000円　寄付収入2,500,000円
研修収入8,000,000円　他）
支出合計14,590,000円（減価償却費を除いた実質支出10,750,000円）

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。
http://www.abram-no-kai.com/
画面右メニュー　"会員専用ページ"（パスワード：UTE48）にログインして、
画面右メニュー　"2018年総会報告"をクリックしてください。

『第７期通常総会について』

今回はあぶらむの里で総会を開催させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。

2018年度会費納入いただいた会員各位に対して、１月下旬～２月上旬頃に第７期通常総会の正式案内状を郵送させていただきます。

日時：2019年３月23日（土）16：00～（15：30～受付開始）
18：00より懇親会
場所：あぶらむの里
議案：第１号議案　第７期活動報告、決算報告、監査報告
第２号議案　第８期活動計画、予算案

2018年あんなこと（あぶらむこの一年）

１月・薄日射し、小雪が舞うおだやかな元旦。補導委託少年も加えてのお正月。
・６日から屋根の雪おろし開始。沢山の雪があるというのに沖縄からの雪祭り訪問団は今年はなし。
・事情により少年の補導委託打ち切り。
・12日カモシカ、ベランダに出現、その後10日間ほど玄関前に番犬のようにして居座る。桃子と名付ける。
・東京でも積雪の大雪で交通マヒ。少しは雪国の生活 理解してもらえたかなァ!?
２月・冬仕事の一つ、味噌づくり、薪づくり開始。
・21日　養育里親としてのファミリーホーム設立に必要な資格審査パスの知らせが入る。
・26日　春風が吹き氷がとけ始める。
３月・３日　第６期あぶらむの会総会　於、立教学院チャペル会館、立教学院展示館にて「フィールド エデュケーション、チャペルの働き」開催。
・17日　春一番の会
・23日～４月３日　第15回子どもから大人までのネパールの旅。参加者20名
４月・14日　立教学院展示館見学と卒業生達の集い。50名ほどの参加。
あぶらむの里、桜開花。例年より半月間早い。
・20日～23日　第25回さくら道国際ネーチャーラン開催（名古屋－金沢250km）
国内外ランナー136名参加。
・28日　蜜蜂巣箱設置。畑起こし。
５月・１日　じゃがいも植え。田起こし開始。
・８日　田の代かき開始。
・16日　５月というのに30℃超える。暑くなりそうな年になる予感。

・19日　田植え

・25日～29日　岩手県陸前高田の被災地訪問。意義深い交流の一時を持つ。

６月・５日　例年より早く梅雨入り。しかし雨はほとんど降らず。

・16日　家庭裁判所補導委託の少年来る。21人目を数える。

・田の一部、大発生したモグラの穴で畦（あぜ）から大量の水がもれ出す。補修に３日間の重労働。

７月３日～７日　４日間大雨が続く。各地で大きな被害が出る。高山線も５ヶ月近く不通となる。あぶらむの里は最小限度の被害で済む。

・８日　集中豪雨を置き土産にして梅雨明けとなる。

・各地で記録的高温が続く。岐阜多治見で41℃、あぶらむでもその日38℃！

・29日　定例 岐阜 生と死を考える会宿泊研修。それに続く岐阜里親会家族キャンプは台風12号の接近で中止。受け入れ準備を整えていたあぶらむとしては大きな痛手となる。

８月・立教大学 PRC フィリピン・キャンプ事前合宿。

・６日～11日　あぶらむ里山自然学校、サポートスタッフを加え総勢35名余。

・13日　白菜、大根等　秋冬野菜の種まき。

・この夏の異常な暑さ、水害被害の後始末等の疲れが出たのか、ヘルペスにかかりしばらくの間ダウン。

・25日　桂 歌之助　第11回あぶらむの里 落語会。

９月・６日　北海道大地震

・あぶらむの里内で天然の千本しめじ（釈迦しめじ）が大量に採れる。異常気象のおかげか!?

・22日　稲刈り。９月に入り晴れの日少なく、田の乾きは最悪。刈り取り機が入らず手刈りで苦労する。

10月・３日　JA 看護専門学校宿泊研修。

・６日～７日　第11回　ＷＡＹＮＯ　アンデスの風コンサート。持ち寄りコンサート。松茸４本ゲット！

・10日　脱こく、収穫量は平年並み。

・29日～31日　沖縄訪問。大嶺サチさん102歳で大元気。

11月・里山動物のエサとなるコナラの木、どんぐり大不作。熊、里に出没。なぜか落ち葉だけは大量。里内主要道路の落ち葉集めに半月間ほど費やす。

・越冬準備開始。白菜、大根の収穫。

・29日　あぶらむの大恩人　沖縄教区退職司祭の鬼本照男先生、90才１ヶ月で天に召される。

・30日　ファミリーホームあぶらむの設立許可申請書を岐阜県知事に提出。

12月・６日　家裁補導委託少年帰る。

・10日～13日　理事会等のため東京へ

・あぶらむ通信　発送

・24日　あぶらむクリスマス＆一年ご苦労さん会。

2019年　こんなこと（行事予定）

１月・12日～14日　あぶらむ雪祭り。沖縄より20名余参加。雪がありますように。
２月・９日～11日　あぶらむ周辺雪上ウォーキングと雪遊び
　・23日～24日　猪伏山（1562m）雪上ウォーキング
３月・16日　春一番の会
　・23日　第７期あぶらむの会通常定期総会（於、あぶらむの里）
４月・19日～22日　第26回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）
５月・18日　岩手県陸前高田における被災地応援、杉木峯夫さんトランペットコンサート。
　　NPO 法人チームとも・いき、あぶらむの会共催
　・25日～26日　田植え（予定）
８月・５日～10日　あぶらむ里山自然学校（予定）
　・31日　第12回　桂 歌之助 落語会
９月・21日～22日　稲刈り（予定）
10月・12日　第12回　ＷＡＹＮＯ　アンデスの風コンサート
　・13日　第３回　持寄りコンサート－大人の学芸会
11月・１日～４日　第２回青木恵哉師の道を訪ねてと桂 歌之助 落語会 in 愛楽園
　　NPO 法人チームとも・いき、あぶらむの会共催
　・23日～24日　落葉はき祭

おしらせ

○2020年サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼の旅（予定）

昨年のあぶらむ通信を読まれた方から、サンティアゴ巡礼の旅の企画要望が出ています。

どれだけの希望者があるのか下調べしてから決定したく思います。関心のある方はあぶらむまで ご連絡下さい。

内容的にはフランスの道800km は日程的またグループとしての行動としては無理と思いますので250km ほどを考えています。

・フランスの道ならばアストルガからサンティアゴまでの約260km
・ポルトガルの道ならばポルトガル第2の都市ポルトからサンティアゴまで約240km
・いずれの道も12日間での歩行を考えており、周辺の観光も加え、全行程18日間ほどを予定しています。出発時期は2020年5月末を予定しています。

○あぶらむの米販売致します。

私たちの労作の一つあぶらむ米は田植え時に除草剤一回だけ使用するだけで、それ以外農薬は使用していません。落ち葉の堆肥を田に返したり、有機肥料で育てています。

ハサがけ天日干しでモミにて貯蔵していますので、一年経ってもおいしくいただけます。

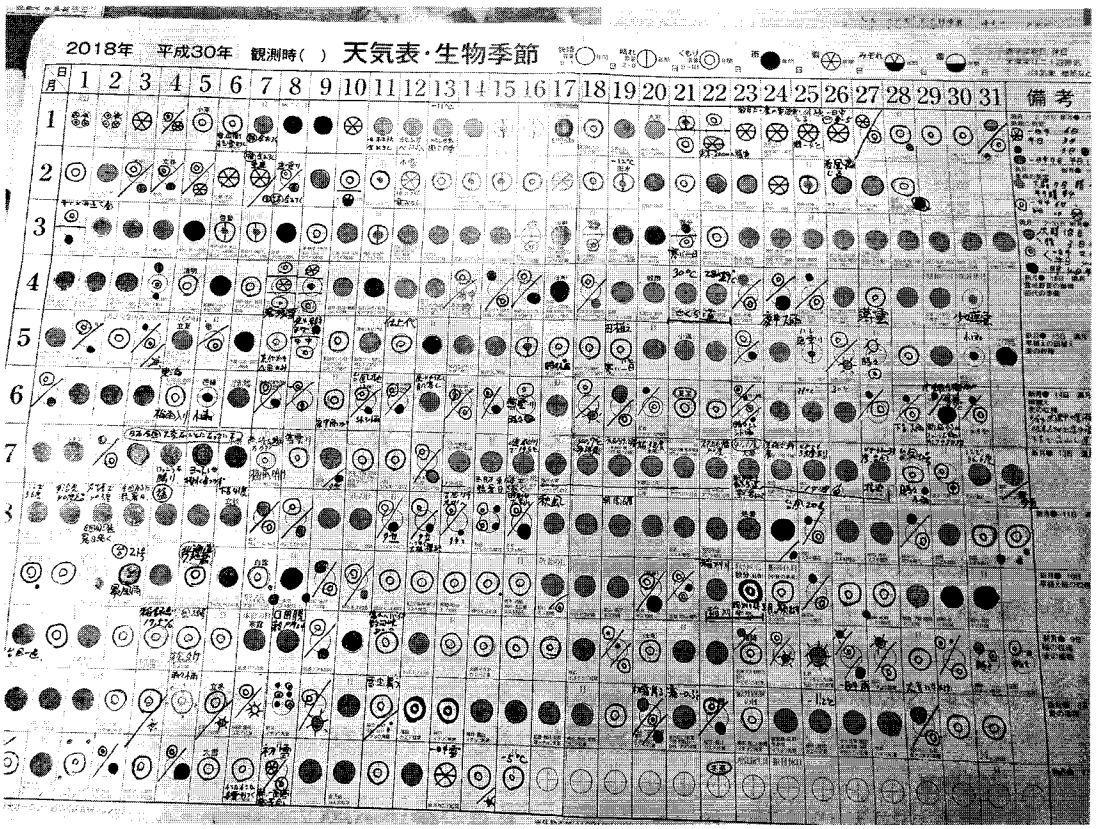
2017年米、2018年米、玄米、精米にてお分け致します。教会の婦人会等でまとめていただければ送料も割安になります。無論、個人販売も致します。お買い求めいただければ嬉しく思います。

・2017年米　2,000円（玄米・白米）

・2018年米　2,400円（玄米・白米）

詳しいお問い合わせはあぶらむの会まで。いずれも5kg詰で送料別途の料金です。

初めて完成となった今年の天気図



幾度試みても挫折してしまった年間天気図。今年初めて完成した。晴れの日多く、雨の日は30日を超えることはなかった。「天気」というものに一段と深く関心を持つようになった。あなたも試みてみませんか。

寄付者一覧（'17年12月18日～'18年12月12日）敬称略

青柳真智子／安藝淳二／浅野純子／新家恵子／㈱アリミノ　田尾兵二／五百蔵久子／池田正毅／市川聖マリヤ教会／一柳典利・百／井上るみ子／上原栄正／鵜川久・貴子／鵜川雅行／岡田賛三／小島正則／小野田恵子／尾林玲子／片桐多恵子／片山佳子／加藤寛／吉川恵子／香村美成／小柳證／坂本吉弘／佐藤敏子／佐藤芳子／沢野弥生／田中誠／静谷英夫／柴原薫／清水秀明／下地道子／白神雄・幹子／新崎春子／杉浦進・恵美／杉木峯夫／鈴木冴子／鈴木武次・保子／鈴木宣子／須田肇／税理士法人ＪＭＳ岩沢 満／高島順太郎／高瀬留美／高橋秀／高濱友理江／高柳真／滝谷美佐保／橘正与志／谷章子・こころ／俵里英子／丹安紀子／中部学院大学宗教委員会／寺田信一／東京セントポールライオンズクラブ／遠山章夫・秀子／戸田實／富永紀子／富山聖マリア教会／直井雅子／永井深雪／中島務／中西和子／中野えり子／中村力・英子／中村芳枝／西田邦昭／西田浩子／日本聖公会沖縄福祉会聖マルコ保育園／日本聖公会ナザレ修女会／野田修治・洋子／野村千代子／羽柴加寿代／長谷川秀司／長谷川牧子／畑井正則／畑野寿子／速水直子／原川恭一／㈲人の森野田直人／古川斉／北條鎮雄／八月朔日浩・圭子／星野一朗／前田晃伸／前田容子／松井勲／松平信久／松戸聖パウロ教会／三沢悠子／宮古聖ヤコブ教会／宮田洋子／宮本房江／武藤六治／諸岡研史・千佐子／八木克道／矢崎ふき子／矢部直美／山田益男／横浜聖クリストファー教会／レーマン幸子／若林新平／無名氏３名

物品寄付者一覧（'17年12月18日～'18年12月12日）敬称略

㈱アリミノ　田尾兵二

ガヴィス基金　本年度支援先

NPOアジア子どもの夢／東日本大震災被災地応援

2017年会費納入者一覧（'17年12月18日～'18年12月12日）敬称略

相沢牧人／赤井充也／赤松道子／秋本光一郎／朝野恵美子／朝比奈誼／朝比奈時子／味岡敏江／穴井悦子／雨宮寿子／飯島千津子／飯田孝太郎・佐恵子／池淵透／石原つや子／一柳典利・百／伊藤幸史／伊東日出子／伊藤浩子／岩佐葵史子／上田敏明／上村誠／鵜川久・貴子／内田孝・由美／宇野徹／江洲文子／太田喜元・昌子／大平和子／大房健樹／大家俊夫／尾崎和廣／小野裕・伸子／小野翠／笠井正志／笠原雅子／勝山千里／加藤正／金子真／加納厚・美津子／唐木田麻起子／河合昇／河合由美子／川上詩朗・美砂／川上玲子／川口弘二・暁子／河田健二／木島出／岸本望／北昌子／鬼本博文／金城由美子／久世治靖／倉辻明男／倉持昌弘／栗山盛雄／栗山洋子／黒田則子／小池直子／小林賢三／小松純一／小柳證／斉藤寛明／酒井厚子／櫻井智則／笹岡淳也・由紀子／佐藤純／佐藤哲典／佐藤芳子／座間幹生／沢野弥生／塩田純子／篠宮慶次／柴原薫／渋沢一郎／渋谷真理／島文子／清水幸平／志村弘子／下地道子／下田英一・由香／城下彰／杉浦幸恵／杉村進／鈴木武次・保子／鈴木千絵／

鈴木知子／鈴木信子／鈴木康仁／聖母訪問会／仙敷正俊／染谷孝章／高瀬留美／高橋保／高濱友理江／高柳真／竹中浩／竹村真紀／田中孝子／谷昌二／俵里英子／丹安紀子／筑井宏子／寺谷恵美子／桃原松五郎／時高照子／富永隆史・敦子／友野和子／豊永泰子／永井深雪／長坂尚／中台信子／中村洋／中山美世子／西垣正子／西川照／西口晃／西口喜久枝／西村正和／野崎久子／野田修助・和子／萩尾出穂／萩谷長生・睦子／土師晴子／羽柴加寿代／長谷川秀司／長谷川牧子／畑井正春／畑中幸次郎／服部泰子／播磨裕治／藤井誠・ひろ子／古市進／古川秀昭・昭子／古沢昭夫／星野一朗／星野直子／前田晃伸／前田晃／前田広世／前田真智子／前田容子／松井明子／松井勲／松田捷朗／水谷小枝子／溝際庸介／三原エイ／宮崎秀貴／宮脇加代子／武藤六治／宗像千代子／室岡恵／衆樹歩実／八木克道／矢後正子／山内寿美子／山口泰生／山崎美貴子／山田益男／湯田啓一／吉野美智子／吉野康／若園紘志／渡辺雄介

新規会員（'17年12月18日～'18年12月12日）敬称略

宇野徹／金城由美子／秋本光一郎／播磨裕治／渡辺雄介

たずね人

当会正会員の方で昨年12月29日、東京都千代田区小川町駅前の郵便局から一般寄付として5万円をお送り下さった方、ご住所・お名前がありませんでした。よろしかったらご連絡下さればありがたく思います。

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。